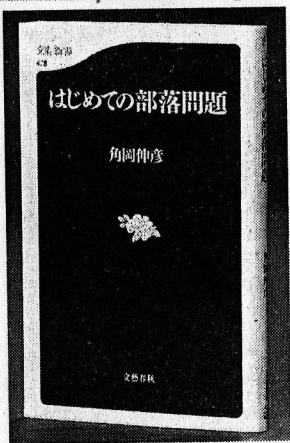


「はじめての部落問題」

角岡 伸彦著



前著『被差別部落の青春』は鮮烈だった。堅物の専門書と違い、現代を生きる出身青年の率直な皮膚感覚に溢れていた。これは、その第二弾と言っている。

とにかく具体的に、わかりやすい。

「部落ってなに?」「部落民って誰?」「部落問題の見方」「部落差別は、なぜ残っているのか」「部落問題をなぜ学ぶのか」「部落差別のなくし方」という六つの章題からもそのことは推察できる。

齒に衣させぬ論は今も健在だ。著者は回顧する。会社を退職し、失業保険をもらいついた際、同和对策事業の一環で規定の金額より多く受給できたとき、「部落に生まれてよかった」と心底思えた。差別落書きでも実行者の精神的幼さに呆れるだけで、傷つくことはないと言いつける。それより、「見えにくい差別」と闘つべきだと主張する。就職差別、結婚差別がそれである。

客観的な「被差別」への視線

被差別部落を美化も卑下もせず、客観的に見つめる視線は、一見ドライ過ぎるかのようだ。だが自己の絶対視を避け相対化する奥には、奇麗(きれい)ことを並べるだけでは突破できぬ現実に少しでも風穴を開け、部落解放へ向け新たな地平を開こうとする熱い思いが宿っている。

綿密な取材と的確なデータを駆使している点も見逃せない。例えば地方自治体に行った同和地区外と地区内の認識調査をもとに、これまでタブー視されていた被差別部落への偏見や実態のとうえ方の双方の誤差や同一性を浮き彫りにし、本質へ迫ろうとする。

被差別部落民の規定に「中心」と「周縁」という概念を起用する点も画期的だ。「部落民」であると自覚する者が「中心」にいて、自覚していない者はもとより、本書を読んだ者までひっくり返る「周縁」、すなわち「部落関係者」とする考えだ。

気がつけば障害者を始め、多くのマイノリティーに囲まれている私も、その資格は充分にあるのかもしれない。何だか、被差別の側で生きることにも勇氣と力が湧いてくる、そんな希望の持てる本だ。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

◇かどおか・のぶひこ 1963年兵庫県生まれ。神戸新聞記者などを経て、フリーのノンフィクションライター。